

出題分析		
試験時間 60分	配点 100点	大問数 4 題
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]	
<p>【概評】</p> <p>文学部では例年短答記述が 50 問出題されるが、今年度は 40 字の小論述 2 問を含む計 42 問となり大きな変化がみられた。また、第 1 問は歴史総合からの出題であった。求められる知識レベルにおおむね変化はなく、漢字がネックとなる中国史の問題もほとんどなかったが、形式面の変化が顕著であることから難化とした。文学部では例年文化史の比重が大きいが、昨年と今年では比較的出題量が少なかった。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	近現代の西アジアと日本	歴史総合の内容が多い大問であり、対策が不十分だと難しかっただろう。B「ブラジル」は日本人移民が多かったという記述も手がかりにしたい。設問(3)「ベネズエラ」は盲点。設問(5)は、第3次中東戦争の年代を覚えていないと解答を絞れない。設問(ア)は文学部では異例の論述問題。製糸・養蚕業に及ぼした影響についてはどの程度深い内容を書くべきか迷うが、解答例では「衰微した」ととどめた。40字以内に収めるためには工夫が必要となる。	やや難
II	古代から近代までのドイツ史	設問(5)が論述である以外はオーソドックスな文学部らしい出題。C「ドミニコ」は、トマス＝アクィナスの出身という記述もヒントになる。設問(2)は文学部特有の年号を書く問題で易しい。設問(3)は(ウ)のブレーメンがやや選びにくい。設問(4)は文化史の正確な知識を必要とし難易度が高い。なお、文学部は時折こうした記号選択式の出題を行う(直近は2022年度)。設問(5)の論述は定番のテーマであり、字数制限がシビアであることを除けば書きやすかった。アウクスブルクの和議については2024年度の経済学部でも小論述として出題されている。	標準

設問別講評			
III	近現代ヨーロッパの国際関係	Aは文学部受験生であれば正答したい問題で、「ドイツ観念論」と『永遠平和のために』からカントとわかる。Dの「エルベ」はヒントが少ないため難しい。Hの日本が国際連盟を脱退した年代(1933年3月)は重要。同年10月のドイツ脱退と併せて覚えておきたい。Jの「経済社会理事会」は最新の山川出版社『世界史用語集』で頻度④となっているものの、入試問題で問われる機会は少なく盲点であった。	標準
IV	セルジューク朝史	B「マフムード」は難問。Eのバグダード入城の年もやや細かい。Fは「イラン中部」「16世紀末に首都となる」「世界的な大都市」などの記述からイスファハーンと判断したい。J「耶律大石」は、遼の建国者である耶律阿保機との混同や漢字ミスに注意したい。	標準

合格のための学習法

文学部は記述式の問題が大半を占めるので、用語は正確に書けるようにしたい。特に漢字には注意しよう。空欄補充問題では用語を入れづらいこともあるため、教科書や用語集をよく読み、周辺知識を蓄えておこう。空欄が複数箇所ある場合は、1箇所だけを見てわからないと判断せず、他の箇所も見て総合的に判断したい。地名が問われることも多いのでおろそかにしないこと。例年、年代を答えさせる問題も出題されるため、重要な年代は覚えておきたい。過去問を多く解いて、空欄補充形式に慣れておくことも有用である。また、今年度のような小論述が再び課される可能性もある。短答記述対策を学習の核としつつ、余力があれば商学部や経済学部の論述問題にも触れておくとういだろう。